

新版絵草紙シリーズ VII

十返舎一九の

坂東 秩父

埼玉道中記

さき

たま

〈校注者〉 鶴岡節雄（つるおか ときお）

1915年千葉県生まれ

主な著書「房総文人散歩」（千秋社）

「歴史小品 上総のくに」（総南文化研究会）

新版絵草紙シリーズ「十返舎一九の房総道中記」

「山東京伝の白藤源太談」「仮名垣魯文の成田道

中記」「十返舎一九の甲州道中記」「十返舎一九

の江戸見物」「十返舎一九の箱根・江の島・鎌倉

道中記」（以上千秋社）

現住所 〒298 千葉県夷隅郡大原町新田3537

☎04706 (2) 1938

新版絵草紙シリーズⅦ
十返舎一九の坂東
秩父埼玉道中記

印刷 昭和五十八年二月二十日
発行 昭和五十八年三月一日

校注者 鶴岡節雄

発行者 能勢 潔

発行所 千秋社

〒101 東京都千代田区西神田三一九―一四
☎〇三（二六四）六七―八（代）

印刷 図書印刷

ISBN4-88477-067-6 C0093 ¥1200E

落丁・乱丁の際はお取り替えいたします。

新版繪草紙シリーズⅦ

十返舎一九の

坂東
秩父
埼玉道中記

校注
鶴岡節雄

凡 例

- 一、本書は、国立国会図書館所蔵本を底本とした。ただし改版と思われる部分（『秩父順礼』のうち、第二十五番から第二十八番札所まで）の文中、完全でない箇所については、「帝国文庫」などを参考として一部補充し、（ ）で示しておいた。
- 一、本文は読みやすいように句読点をいれ、名詞、固有名詞の部分は、なるべく漢字を当てた。

- 一、参考資料は、本文中にも注記したが、主なものは次のとおりである。（敬称略）
- 『新編武蔵風土記稿』、沙門円宗 『秩父三十四所観音靈驗円通伝』、沙門亮盛 『坂東三十三所観音靈場記』、『秩父記行』、金指正三 『西国坂東観音靈場記』、清水谷孝尚 『観音巡礼』、道興准后 『廻国雜記』、『宗祇諸国物語』、玉村竹二 『仏国師略伝』、盛徳沙門 『本朝高僧伝』、『東都歳時記』、角川書店 『埼玉県地名大辞典』、中尾堯 『古寺巡礼辞典』

目次

坂東順礼道中記(序) 6

峯が崎(東京都西多摩郡瑞穂町)・金子(入間市)・並柳(飯能市)・か山(入間郡日高町)・平沢(入間郡日高町) 7

比企慈光寺(比企郡幾川村) 9

比企岩殿(比企郡幾川村)・比企吉見観音(比企郡幾川村) 11

深谷(深谷市)・本庄(本庄市) 13

岩槻慈恩寺(岩槻市) 15

坂東順礼終 17

秩父順礼道中記(序) 18

江戸板ばし(東京都板橋区)・ねり馬(東京都練馬区)・白子(和光市)・ひざ折(朝霞市) 79

大わだ(新座市)・大井(入間郡大井町)・河越(川越市) 21

高坂(東松山市)・菅谷(比企郡嵐山町)・小川(比企郡小川町) 23

安戸(秩父郡東秩父村)・坂本(秩父郡東秩父村)・峠(秩父郡東秩父村)・皆野町 25

四万部(秩父郡秩父市)・大棚(秩父郡秩父市) 27

岩本(秩父郡秩父市)・あら木(秩父郡秩父市) 29

古賀(秩父郡秩父市)・牛伏(秩父郡秩父市) 31

萩の堂(秩父郡秩父市)・西善寺(秩父郡秩父市) 33

子之権現(秩父郡秩父市) 35

明智寺(秩父郡秩父市)・太子寺(秩父郡秩父市)・坂郡(秩父郡秩父市) 37

野坂寺(秩父郡秩父市)・はけの下(秩父郡秩父市) 40

今宮^{いまみや} 秩父十四番(秩父市) 42

ぞうふくじ 秩父十五番(秩父市)・妙見(秩父市) 44

西光寺^{さいくわうじ} 秩父十六番(秩父市)・林寺^{はやしでら} 秩父十七番(秩父市) 46

がうと 秩父十八番(秩父市)・りう石 秩父十九番(秩父市) 48

岩の上^{いわのうへ} 秩父廿番(秩父市) 50

矢の堂 秩父廿一番(秩父市) 52

わろう堂 秩父廿二番(秩父市) 54

おが坂 秩父廿六番(秩父市) 56

白山 秩父廿四番(秩父市)・久那堂^{くなだう} 秩父廿五番(秩父市) 58

下影森^{かげもり} 秩父廿六番(秩父市)・上影森^{かかげもり} 秩父廿七番(秩父市) 60

橋立^{はしたて} 秩父廿八番(秩父市) 62

さゝのと 秩父廿九番(秩父郡荒川村) 64

深谷^{ふかたに} 秩父三十番(秩父郡荒川村) 66

ひげそう大師(秩父郡荒川村)・三ツ峯^{みつね}(秩父郡荒川村) 68

わしのいはや 秩父三十一番(秩父郡小鹿野町) 70

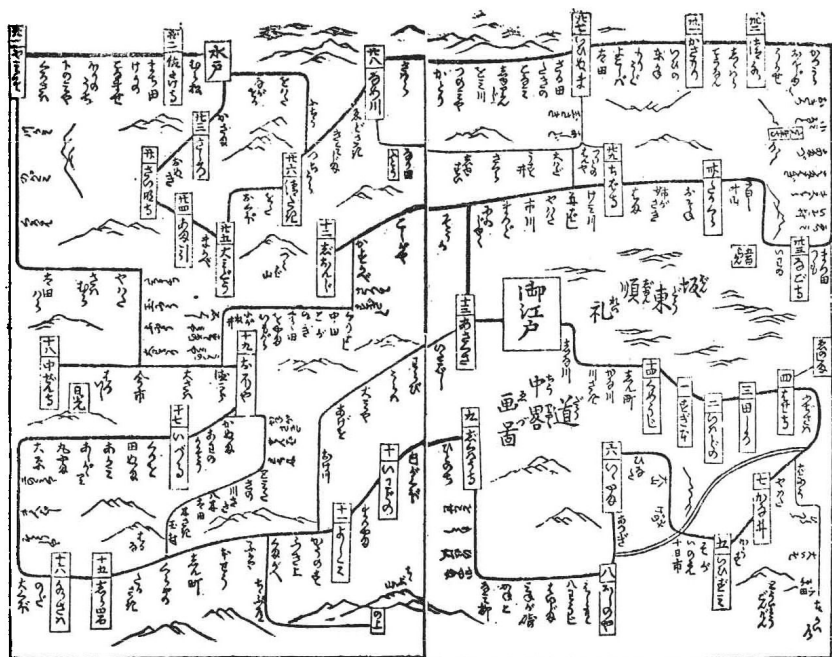
般若堂^{はんにやだう} 秩父三十二番(秩父郡小鹿野町)・ござかけ 秩父三十三番(秩父郡吉田町) 72

水潜^{くより} 秩父三十四番(秩父郡皆野町)・順礼打納^{おさまね} 74

参考資料『百番観世音靈驗記』のうち「秩父三十四番」 77

十返舎一九の

坂東
秩父
埼玉道中記



坂東順礼道中略図

方言修行金草鞋十編坂東順礼之記序―年々此金の草鞋を梓行して、既に九篇に及びたりしに、祥ぬに行るゝ迎、書肆また坂東順礼の記行を索む。予西国巡礼ハ先年紀州和歌山にいたりし時熊野那智山にも参詣し、其后西国遊歴の帰るさ播州路および丹後の馴合、天のはしだてを一見して、近江美濃谷汲まで悉く廻りし故、概その光景を知るが故に編りたれども、此坂東順礼ハ不案内にして精しからざれば、辞するといへども免されず。仍て先その役を塞ぐために省略してこれを著すものなり。されど道筋の前後、順逆里数駅々名諸ハ、再三正して謬誤少もなからしむ。しかれば順礼の人、此草紙をふところにして出玉ふとも害なく小益ありぬべし。又旅泊のつれく戯れによミ玉へるに、おのづからその勞倦を慰するのたすけともなりぬべしと。九編に嗣て、ことしの新版となすのみ。

文化

十返舎一九戲著



峯が崎・金子・並柳・
か山・平沢

(1) 拝島と峯が崎の間に玉川あり。それより金子、並柳、鹿山、平沢などを打すぎ越生といふにいたる。この辺すべて難波の所にて、仕度すべき茶屋なく不自由なり。とかく弁当のしたくしてもつべきなり。「金子、峯が崎の間、難波の道なれば」
 平ふところに金子ありてもいかにせん 旅のうきめを峯が崎とて
 「並柳にて念仏踊を見て」
 踊極案ハこゝにこそあれ念仏も踊るひやうしに法のミちかな
 春きぬとこゝにも世間なミ柳
 梅のか山も匂ひこそすれ

- (1) 拝島―東京都昭島市
 拝島町。「拝島の渡し」
 市とを結んでいた多摩川の渡し。現在の拝島橋。
 (2) 峯が崎―箱根ヶ崎か。東京都西多摩郡瑞穂町。八王子千人同心の日光勤番に伴い日光往還の拝島の宿に次ぐ二番目の宿として発達。青梅街道も交差。または、入間市、霞川の両岸に位置する近世、峯村(入間郡金子郷の内)か。
 (3) 玉川―多摩川。
 (4) 金子―埼玉県入間市。
 (5) 並柳―双柳。埼玉県飯館市。
 (6) 鹿山―埼玉県入間郡日高町。
 (7) 平沢―右同。
 (8) 越生―埼玉県入間郡越生町。
 (9) 難波―難儀。
 (10) 仕度―食事をすること。

「なんと年ハよつてもわたしの声のわかいところを御ろうじろ。声も心もどこもかもまだわかいから、これでもわたしハ奇麗な二才と色事をしております。それが嘘ならだれにでもきいてみなさい。だれもしつたものはないに」「この婆さまたちハよくわれた所が、あてがあるまい。ねれ話にねてしまふのだな」「いかにお世話、相応にこれでも親父たちが、わしどもをはりかけます。今でこそこんなだけれど、五十年ばかりあとまでハ色も白くて、こんなにおけんつうでハなし人にもなんのかのと袖褌ひかれたことがあったが、十年ばかりあとの煩で、頭ハ薬罐になる、口ハつるしあがる、それに頬べたへ、こんなにたん瘤が二つまでできたから、はしまらない」「さて／＼どれも／＼あぶなげのない婆さんたちのおそひだ。なかでもこゝへ杓をもつてきた女が、ちつとハ水けがあるやうだ。これなら一口ぐらいハよかろうか。いや／＼よく見ると、こいつも面が汚細工でつまらない」「わしどもの出たあとでハ、大かた嫁どもがよつてたかつて、てん／＼にわしどものことをわるくいふだろう。ハア／＼しやミ／＼」「今度、長崎から幫間がくだった。一人や眼一で、一人ハ跛、なかの一人ハめつぼうに背がたかいな、あとの一人ハめつぼうに背がひくいな、さま、てんれつ／＼」

「観音堂建立、多少にハよりませぬ。お心もちしだいおたのミ申ます。どなたもお心もちハよござりますかな。たび人「ハイ、今あとの立場で一杯ひっかけきたら、大きに心もちハよござります」

(11) 二才にせえ。新参の若者。

(12) ねれた一女陰がやわらかくなる。末摘花三に「機織はよくねれようと馬鹿ッロ」。

(13) はりかけ張り合う。おもひをかけた人を、互に手に入れようとして争う。

(14) けんつうー見通。向うを見通す意で、侮べつの意を表わす。

(15) おそひー「おそろひ」か。

(16) 汚細工ー野卑。

(17) てん／＼ーめい／＼。くつしやミーくしやみ。

(19) 幫間ー遊客のきげんをとりむすび、酒宴の席をとりなすのを業とする男子。

(20) 眼一ー片目。

(21) 跛ー足の不自由な事。

(22) さまーようす。なり

ふり等をにく／＼し

そうにいう語。

(23) てんれつー天罰の意

か。

(24) 立場ー街道などで、人夫が駕籠(かご)などをとめて休息する所。



比企慈光寺（坂東九番）

毛宇⁽¹⁾といふより越生⁽²⁾、大野⁽³⁾といふにいたる。この所より秩父⁽⁴⁾の四万部へ三里半あり。大野より武蔵⁽⁵⁾の慈光寺へ一里あり。○第九番の札所、千手観音、行基菩薩の作。御詠歌

きくからにだいひ大じのじくはう寺 ちかひもともにふかきいハどの

困^{なす}諸人の助け玉へとみほとけにひかれて比企^{ひき}にまいる慈光寺

「コレ^こ／＼乞食^{こじき}め、いくらついても、おらがそのかミさまハ⁽⁷⁾吝坊^{しんぼう}の柿

の種^{たね}だから、下さることへない。昨夜^{ゆふべ}のとまりで、おれがてうど手前^{てまへ}

のいふやうにお情^{なさけ}でござります、お

(1) 毛宇——埼玉県入間郡毛呂山町。

(2) 大野——埼玉県比企郡都幾川村。

(3) 秩父の四万部——27頁注参照。

(4) 武蔵の慈光寺——都史山（又は都幾山）。埼玉県比企郡都幾川村。

(5) 武蔵の遺跡、白鳳元年、沙門慈訓和尚、東国に遊歴して、千手観音を安置す。

（坂東観音霊場記）以下「坂東」と略す。

(6) 行基——奈良時代の高僧。百済系の帰化人。伝承によれば、早くから出家、はじめ官寺で法相宗を学び、のち民間布教に従事。池溝、道橋、布施屋を各地に開いた。草そよぐ塩瀬の浪のいつまでかうき世の中にうかひ渡る」。

(7) 御詠歌——新古今集巻二十の「坂東」の巡礼詠歌は「頼もしや慈光の山に登り来てその曉にえにし結べば」。

慈悲でござりますとくどひたら、出たのがない、つくなくといつたから、今度あのおかミさまが錢湯^{せんとう}へいく時ついていて、でたのがある時もらうつもりだ

「この乞食^{びき}へ、もふ四五里ほどあとからついてきたが、どこまでついてくるの見だやら。きこへた、このこじ先生^{せいしん}、このかミさんに気があると見へた。それでうるさくついてくるのだな。もし、おかミさん、縁切^{きり}に一文^{もん}やっておしまひなさい
「エ、この乞食^{びき}へひつこい。わしハ錢^{ぜに}も金^{かね}ももってハゐらないに、あれ／＼いっそ駕籠^{かご}の中へ顔をいれそふにする。これ／＼手前^{てまへ}ハおれにほれてついてくるのか、そふならそふと代^{しろ}でこつちへもらひたいものだ

かごかき「なるほど、このおかミさまハ如才^{にが}のない人だ。乞食にまでほれられたを代^{しろ}でとうとうといふ。道理でさっきからおかしな目つきをして、わしの顔をじろり／＼と見るが、わしにまたほれさせて、この駕籠^{かご}にたゞのろうとおもつてか、おしのつよい「みんながそのかミさまのことをわるくいふが、おれハほめてやりませう。たれがなんといつてもきついものだ。この一町^{いっちょう}ハそのかミさまでもっている

「はい／＼御繁盛^{ごはんじやう}のおくさまから一文^{もん}やつてくださりませ。四文^{しぶん}錢^{ぜに}なら三文^{さんもん}つりをそへてくださりませ

「このかミさまハかるいやうでよつぽとおもい。どふでも尻^{しり}に目方がたんとあると見へる。むしがしらせて、おれが後棒^{あとぼう}へまはらなんだがしあハせだハへ

(7) かミさま——上様。かみさん。近世、町家の主婦。

(8) 吾坊^{ごぼう}——けんぼう。

(9) ぐどく——口説。意中を切に訴える。

(10) 了見^{りょうけん}——考え。

(11) きこへた——訳がわかった。

(12) こじ——乞食の略。

(13) 代——しろ、代金。

(14) 如才^{にが}——ない、ぬけめがない。

(15) きつい——ひどい。

(16) 後棒^{あとぼう}——かごの後方をかつぐ人。あとかた(後肩)。



比企岩殿（坂東十番）・

比企吉見観音（坂東十一番）

慈光寺より内久保、入市をすぎて

比企の岩殿○第十番千手観音、行基

菩薩の作。境内に岩石おほく、さま

／＼仏のかたちを石にできざミたる

おほく、いたってひろき岩穴あり。

御詠歌

のちのよの道をひきミのくはんせ

おん このよをとものにたすけたま

へや

罔有がたさ弥／＼いハヤのくはん

をんに 詣ていつか泪こぼるゝ

じゅん礼「コレ噂どの、あぶない

ぞ、おれがこのこへい手でそなたの

やらかな手をひいてやろう。これ

(1) 内久保―埼玉県比企郡都幾川村。

(2) 入市―埼玉県比企郡玉川村玉川の内。

(3) 比企の岩殿―岩殿山正法寺。埼玉県東松山市。もと神仙遊

栖の地にして、人跡を絶つ幽洞なり。

壘岩壁立して四望樓閣の如くなれば、土

人称して岩殿山と云ふ。常に奇雲山の頂

林を照らす。有信の者は稀に音楽を聞く。〔坂東〕

(4) 御詠歌―「坂東」の巡

礼詠歌は「詣でくる浮世の人をもらさじと誓ひの網をひきの岩殿」

(5) こへい―かたい。

へどなたもちとうけにくが、まっぴら御めん下さりませ

「あまり手のひきばへもしないかミさまだ。御かつて／＼」

松山より〇十一番吉見の観音。これも吉見の窟といふ観音、岩のうちにあり。

それより中仙道の鴻巣へいづるなり。岩槻の慈恩寺へゆきてもよし。この草紙にハ岩槻をあともまへしたれば、鴻巣より熊谷にいづる。〇十一番吉見寺御詠歌

よし見よとあまのいへとをおしひらき 大じ大ひのちかひたのもし

「ハイお茶あがりませ。この茶碗ハ、わたしが今のんだ茶碗をあらはすにくんでまいりました」

「ヲヤ娘、お前ののんだ茶碗ならありがた
いが、わしハこゝの婆さまののんだ茶碗で
ミたい。あの年にあやかるとやうに

「あやかりなさりませ。わたしのとこの婆
さまハ、五年このかた中風とやらで体がき
かないでねてばかりおりますから、それに
あやかっておかへりなさりませ

「なんぞ塩物くさったのがあろうから、水
のまじっている酒とそれとを出してくれなさ

い



比企岩殿の石仏



吉見観音の大仏

(6) 松山—埼玉県東松山市。

(7) 吉見の観音—岩殿山安楽寺。埼玉県比企郡吉見町。

「昔この地に吉見兵庫介と云ふ人在于て、先祖より持仏堂に安置する聖観音の像を守りて、北地へ移し奉らんとするに、尊像重く、数百人の力にも堪えがたく、せんかたなく、石郭に入れて山の腰の岩窟に納め置きしと。」

(坂東)

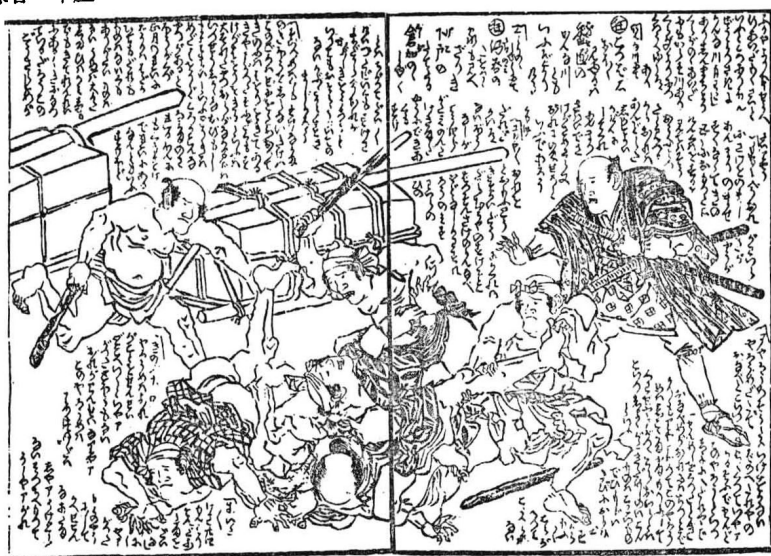
(8) 鴻巣—鴻巣市。

(9) 岩槻の慈恩寺—15頁注参照。

(10) 熊谷—熊谷市。

(11) 御詠歌—「坂東」の巡礼詠歌は「よし見よと法の誓戸をおしひらき照らす恵みの限り無きかな」

(12) 中風—中気。



深谷・本庄

(1) 深谷より本庄へ行あいだ牧西といふ所あり。本庄より先に神流川舟わたりあり。新町より倉賀野へあいだにも烏川あり。倉賀野より日光へゆく道あり。

「神流川にて

屈こつば石おほく見ゆるハ番匠の

かなな川ともいふべかりける

「倉賀野の宿にて

屈酒呑のたをるゝ家も見へざりき

下戸のたてたる倉加のゝしゆく

さいりやう「コリヤ／＼今おれが

わいらに酒をのましたが、あんまり

のませやうがすくなくてきのどくに

おもった所、喧嘩をするを見てハ相

(1) 深谷―埼玉県深谷市。

(2) 本庄―埼玉県本庄市。

(3) 牧西―埼玉県本庄市。

(4) 神流川―利根川の支流。

(5) 新町―群馬県多野郡。

(6) 倉賀野―群馬県高崎

市。

(7) 烏川―利根川の支流。

(8) こつば―木端。木く

ず。

(9) 番匠―「大工」と「地名」(比企郡玉川村)をかけている。

(10) 倉加の―家の「倉」と地名「倉賀野」をかけている。

(11) さいりやう―宰領。荷物を運送する時につき添って、人夫を監督する役。

応によつたと見へるから、おれハ安堵した。しかし、よいかげんにしてくれ、あんまりさハいで酒がさめたら、又おれにのませろといふであらう。くも助「コリヤ／＼おれをだれだとおもふ。東海道、木曾街道にかくれの無い棒鱈無茶助底なしが末孫、酒の爛鍋鉋四郎、宿なしが忘形見吞太郎吞助さまだ。わいらのやうにできあひの雲助とハちがつて代／＼系図たゞしい雲助さまだから、今おれが株式をうろうといつても、おそらく買手のない株だから、すさまじかるう。」「そいふめハ雲助仲間の作法をしらない。きけばこの頃ハ錢をためおつて、昨日ハ羽織をきてあるきやアがつたそふだ。雲助が羽織をきるといふハ大それたやつ、おらが仲間でハ一生四角な帯もしますまいといふ取極だ。羽織どころか、こんなやつがあると仲間の作法がくづれる。ほんに正月の礼にも雲助ばかりハ裸で礼にあるひても、だれもなんともいふ者ハない。雲助ほどありがたいものハない。うぬハ大かたしまひハ上下でもきて、年礼にあるく気になっているだらう、この業曝めが「コノ野郎め、そうたいいけすかない野郎めだ。立場のへたれ屋のおなべと、こいつち／＼くつていやアがるそふで、先度この野郎といつしよにへたれやで一膳飯をくつた時、おなべめが、おれにハちつとばかりもりやアがつて、この野郎めハしこたま山盛にしてくわせやアがつたから、おいらとハこいつ食敵だ。飯の遺恨といふものハこわいもので、ひもじいたびにおもひ出すからもふ／＼腹がへつてこらへられない(略)

- (12) 棒鱈——「放蕩」にかけたしやれ。
 (13) 忘形見——遺児。
 (14) わいら——汝等。目下
 にむかつていう対象
 代名詞。対象をの
 していうときにも
 用いる。
 (15) 取極——とりきめ。
 (16) 上下——武家の礼装。
 (17) 業曝——悪業の報い
 として恥を世間にさら
 すこと。
 (18) そうたい——もともと。
 (19) いけすかない——「い
 け」は接頭語。「す
 かない」をのしり
 気味でいう語。
 (20) ち／＼くる——乳繰。男
 女がひそかに馴れ
 合する。私通する。野
 合する。
 (21) 先度——さきごろ。こ
 の間。
 (22) しこたま——たくさん。
 どっさり。



岩槻慈恩寺（坂東十二番）

八幡⁽¹⁾より市川⁽²⁾、松戸⁽³⁾、新宿⁽⁴⁾、それより奥州街道へ出て、草加⁽⁵⁾、越谷⁽⁶⁾、粕壁⁽⁷⁾をうちすぎて岩槻道へはいり、岩槻⁽⁸⁾の慈恩寺へまいる。第十二番 hands 観音、慈覚大師⁽⁹⁾の作、本堂ハ十三間四面なり。御詠歌

じおんじへまいるわが身もたのも
しや うかむけしきを見るにつけ
ても

囲みほとけの慈恩寺にあふ旅なれ
バ たれもうしとハ岩槻のてら
この慈恩寺ハ、はじめ十一番の札
所、吉見寺より鴻巣⁽¹⁰⁾へ出、この慈恩
寺へまいりてもよし。その道筋ハこ
ゝに（※）しるす。あとにてもさき

(1) 八幡 千葉縣市川市
(2) 市川 右同

(3) 松戸 千葉県松戸市

(4) 新宿 東京都葛飾区

(5) 草加 埼玉県草加市

(6) 越谷 埼玉県越谷市

(7) 粕壁 埼玉県春日部市

(8) 岩槻の慈恩寺 華林山、埼玉県岩槻市

「慈覚大師、関東の霊地を巡歴し、勝道・空海の旧跡、日光山に登り、虚空に向って投げたる李の今この地に落ちて奇特を顯すと。」（坂東）

(9) 慈覚大師 平安初期天台宗の僧、最澄（伝教大師）の弟子、入唐、延暦寺三世座主となる。台密山門派（円仁）の祖。開いた寺は東北地方に多く、出羽立石寺に死んだと伝える。

(10) 御詠歌「坂東」の巡礼詠歌には、

「法の華句ふ林の寺の池しづめり身さへ浮む七嶋」また一首「沈む身の池に夏嶋